

【 復活讃詞 第2調 】

し せ ぎ る い の ち よ 、 な ん ぢ し に く だ り し
 死 生 命 爾 死 降

と き 、 か み の せ い の ひ か り に て ぢ ご
 時 神 性 光 地 獄

く を こ ろ せ り 。 し せ し も の を ち か よ
 殺 死 者 地 下

り ふ く か つ せ し め し と き 、 て ん ぐ ん み な
 復 活 時 天 軍 皆

よ び て い え り 、 い の ち を た も う し ゆ
 呼 曰 生 命 賜 主

ハ リ ス ト ス わ が か み よ 、 こ う え い は な ん ぢ に
 吾 神 光 榮 爾

き 歸
 す 。

【 生神女就寝祭のアポリティキオン 第1調 】

し ょ う し ん ぢ ょ よ 、 な ん ぢ は う む と き ど う て い
 生 神 女 爾 産 時 童 貞

を ま も れ り 、 ね む る と き せ か い を の こ さ
 守 寝 時 世 界 遺

ぎ り き 。 な あ ん ぢ は い の ち の は は と し
 爾 生 命 母

ていのちにうつれり、なんぢのきとうを
 生命移 爾 祈 禱

もってわれらのたましいをしよりのがれし
 以 我 等 靈 死 脱

めたもおう。
 給

【日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調】

こうえいはちちとこ と せいしんにき
 光 榮 父 子 聖 神 歸

す、

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光

しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのたために、いのちをたもうせい
全世界 爲 生命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
三者 祈 給 え。

【 生神女就寝祭のコンダック 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。
今 何時 世 世

きとうにねむらざるしょうしんぢよ、てんたつに
祈 禱 眠 生 神 女 轉 達

かわらざるたのみなるものを、ひつ
變 倚 望 者 を、 樞

ぎとしとはとどめざりき、けだし
死 留 ざ り き、 蓋

えいていどうぢよのたいにいりしもの
永 貞 童 女 胎 入 者

はかれをいのちのははとしていのちに
彼 生 命 母 として 生 命

うつしたたまえり。
移 給

司祭) (黙誦： せい かみ せいじゃ うち いこ せいさん こえ もつ かしょう
聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讚榮せられ、 さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう
悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と

ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、

ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行 う者を棄てずして、其 救 の爲に痛悔

た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
を立て、我等卑しくして不當なる 爾 の諸 僕を、此の時に於ても、 爾 が聖な

さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾 に當然の伏拜讚榮を 奉 るに堪うる者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
なしし主宰よ、 爾 親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾 の仁慈を

もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈 と體 と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
を聖にし、我等に生涯善功を以て 爾 に務むるを得せしめ給え、 聖なる

しょうしんぢよ こせい なんぢ よるこび な しょせいじん きとう よ
生神女と古世より 爾 の喜 を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋 我が神よ、 爾 は聖なり、我等光榮を 爾 父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖
じょうせいのものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖
なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわれめよ。
 こうえいはちちとことせいしん神にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわれめよ。
 せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第2調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅ は わ が ち から、 わ が う た な り、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我
 が す く い と な れ り 。

誦經) ^{しゅ きび}主は^{われ ばつ}厳しく我を罰したれども、^{われ し わた}我を死に付さざりき、

しゅ は わ が ち から、 わ が う た な り、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我
 が す く い と な れ り 。

誦經) ^{しゅ わ ちから わ うた}主は、我が力、我が歌なり、

か れ は わ が す く い と な れ り 。

【 使徒經 (アポストロス) 141 端 コリント前書 9 章 2~12 節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒^{じん たつ}パウエルが^{ぜんしょ よみ}コリント人に達する前書の讀、

司祭) ^{つつし}謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい なんぢら しゅ おい われ しとしょく いん われ ぎ もの わ こた}兄弟よ、爾等は主に於て^{ところこれ}我の使徒職の印なり。我を議する者に我が答うる所是

^{われらあにくら の けん われらあにしまい つま たづさ た しとおよ しゅ}なり。我等豈^{けん}食^{けん}飲^{けん}むに權なきか。我等豈^{けん}姉妹なる妻を攜^{けん}うる^{けん}こと、他の使徒及び主の

^{けいてい およ}兄弟、及び^{ごと しか けん}キファの如く^{そもそもひとりわれ}然る權なきか。抑^{けん}獨^{けん}我と^{けん}ヴァルナヴァとは^{こうさく}工作せざる^{けん}權なきか。

^{だれ ぐんし な}誰か^{おのれ きゆうよう もつ つと}軍士と爲りて、己の給養を以て^{だれ ぶどう う}勤むるをせん。誰か^{そのみ くら}葡萄を樹えて、其果を食

^{だれ むれ ぼく}わざらん。誰か^{むれ ちち くら}群を牧して、羣の乳を食わざらん。我^{われただひと じょう したが}唯人の情に^{これ い}循いて之を言うか。

^{りつぼう またか い}律法も亦^{あら}斯く言うに^{けだし}非ずや。蓋^{りつぼう する}モイセイの律法に録して^{いわ}云く、^{こくもつ ぶ}穀物を^{おと うし}踐み落す牛には

くち と なか かみ うし ため おもんばか そもそもこれ い こと われら ため
口を閉づる勿れと。神は牛の爲に 慮 るか。抑 之を言うは、特に我等の爲にするか。

こ われら ため しる けだしたがえ もの のぞみ たがえ こくもつ ふ おと もの
是れ我等の爲に録されたり、蓋 耕す者は、望ありて耕すべし、穀物を踐み落す者

そのきぼう ところ う のぞみ これ な も われなんぢら うち しん ぞく もの ま
は、其希望する所を獲る望ありて之を爲すべし。若し我爾等の中に神に屬する物を播

きたらば 爾等の身に屬する物を穫るは、豈大事ならんや。若し他人此の權を爾等の中に

え いわん われら しか われら こ けん もち すなわちおよそ こと しの
獲ば、況や我等をや。然れども我等は此の權を用いざりき、乃 凡の事を忍ぶ、ハリ

ふくいん いささか さまたげ お ため
ストスの福音に 聊も阻礙を置かざらん爲なり。

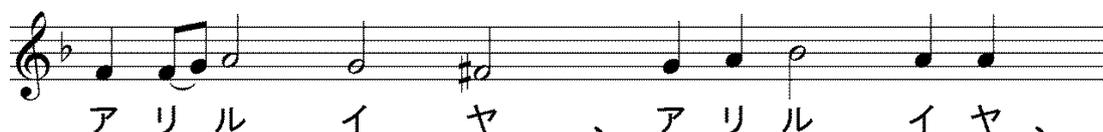
(比較用 口語訳) あなたがたが主にあることは、わたしの使徒職の印なのである。わたしの批判者たちに対する弁明は、これである。わたしたちには、飲み食いをする権利がないのか。わたしたちには、ほかの使徒たちや主の兄弟たちやケパのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのか。それとも、わたしとバルナバとだけには、労働をせずにいる権利がないのか。いったい、自分で費用を出して軍隊に加わる者があろうか。ぶどう畑を作っていて、その実を食べない者があろうか。また、羊を飼っていて、その乳を飲まない者があろうか。わたしは、人間の考えでこう言うのではない。律法もまた、そのように言っているではないか。すなわち、モーセの律法に、「穀物をこなしている牛に、くつこをかけてはならない」と書いてある。神は、牛のことを心にかけておられるのだろうか。それとも、もっぱら、わたしたちのために言っておられるのか。もちろん、それはわたしたちのためにしるされたのである。すなわち、耕す者は望みをもって耕し、穀物をこなす者は、その分け前をもらう望みをもってこなすのである。もしわたしたちが、あなたがたのために霊のものをまいたのなら、肉のものをあなたがたから刈りとるのは、行き過ぎだらうか。もしほかの人々が、あなたがたに対するこの権利にあずかっているとすれば、わたしたちはなおさらのことではないか。しかしわたしたちは、この権利を利用せず、かえってキリストの福音の妨げにならないようにと、すべてのことを忍んでいる。

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第2調 】

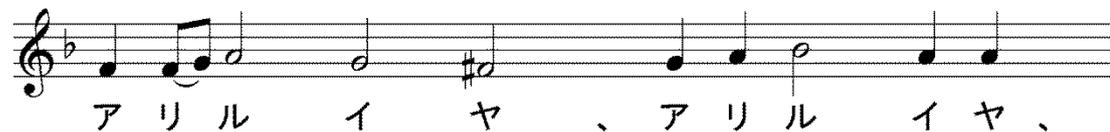
司祭) 睿智、





ア リ ル イ ヤ 。

誦經) 願ねがわくは主しゅは憂うれいの日ひに於おいて爾なんぢに聴きき、イアコフの神かみの名なは爾なんぢを扨ふせぎ衛まもらん、

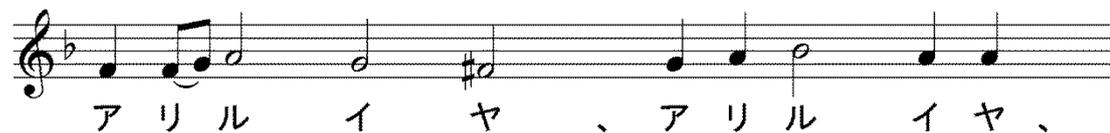


ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、



ア リ ル イ ヤ 。

誦經) 主しゅよ、王おうを救すくえ、又また我われ等らが爾なんぢに呼よばん時とき、我われ等らに聴きき給たまえ、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、



ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: 人ひとを愛あいする主しゅ宰さいよ、我わが心こころに神かみを知しる智ち慧えいの 淨いき光きを輝ひかりかし、我わが思し念ねん

め 目めを啓ひらきて、爾なんぢが福ふく音いんの 教おしえを悟さとらしめ給たまえ、我わが衷うちに爾なんぢの福ふくたる 誠いましめを

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ
畏おそる 畏おそれを 入いれて、我われ等らが 悉ことごとく の 肉にく體たいの 慾よくを 踏ふみ、凡およそ 爾なんぢの 喜よろこぶ 所ところ

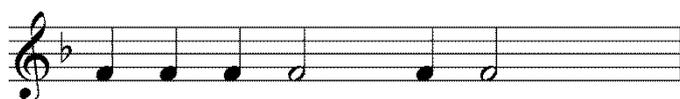
おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
を 思おもい 且かつ 行おこないて、屬ぞく神しんの 生せい活かつを 過すぐるを 致いたさせ 給たまえ、蓋けだし 哈か里み士しトとス 神かみよ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいぜん
爾なんぢは 我わが 靈たまと 體からだと の 光こう 照しょうなり、我われ等ら 爾なんぢと 爾なんぢの 無む原げんの 父ちちと 至し聖せい至ぜん善ぜんにし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て 生いのち命ほどこを 施なんぢす 爾しんの 神こうとに 光えい 榮けんを 獻いまず、今いつも 何いつ時よも 世よ世よに、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 77 端 18 章 23~35 節 】

司祭) 睿えい智ち、肅つつしみて 立たて 聖せい福ふく音いん經けいを 聴きくべし、衆しゅう人じんに 平へい安あん、



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、天國は、其諸僕と會計せんと欲せ

し君王に似たり。會計を始めし時、一千万金の債ある者を彼に曳き來れるあり。其

償うこと能わざるに因りて、主は彼の身と、其妻子と、其悉くの所有とを鬻ぎて、

償わんことを命ぜり。其僕俯伏して、彼を拜して曰えり、主よ、我を寛うせよ、我盡

く爾に償わん。其僕の主は憐みて、彼を釋ち、彼に債を免せり。其僕出でて、

一人の同僚の、己に銀一百の債ある者に遇いて、之を執え、喉を扼めて曰えり、爾

が負う所を我に償え。其同僚彼の足下に俯伏して、求めて曰えり、我を寛うせよ、我

尽く爾に償わん。然れども、彼肯わず、乃往きて、其債を償うに至るま

で、之を獄に下せり。佗の同僚之を見て、甚憂い、來りて有りし所を悉く主に

告げたり。其時主は彼を召して曰く、悪しき僕よ、爾我に求めしに因りて、我其債

を悉く爾に免せり、我が爾を憐みし如く、爾も亦爾の同僚を憐むべきに非

ずや。主乃怒りて、其悉くの債を償うに至るまで、彼を獄吏に付せり。若し爾

等各其心より己の兄弟に其罪を免さずば、我が天の父も亦斯くの如く爾等に

おこな
行わん。

(比較用 口語訳) 天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。決算が始まると、一万タラントの負債のある者が、王のところに連れられてきた。しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。そこで、この僕はひれ伏して哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をし

めて『借金を返せ』と言った。そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言って頼んだ。しかし承知せずに、その人をひっぱって行って、借金を返すまで獄に入れた。その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行ってそのことをのこらず主人に話した。そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸 す。